

は　じ　め　に

学校長 角 本 順 次

昨年度の第3学期に、われわれは新しい研究主題による1回目の研究紀要を発行し、発表会を行った。これは、本校創設以来4年間にわたって続けられた「表現化に視点をあてた教育課程の編成」の研究から、その成果を受けつぎ、一方では新しい視点を加えた再出発した最初の発表であった。しかしながらこれは、その際に述べておいたごとく、新しい主題「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」を目指す「試行的」な取り組みであり、従って、手書きの紀要に象徴されるように、控え目な発表にとどめ、われわれにごく近い位置のかたがたからのご批判を仰ごうとするものであった。ここで得られたご意見は多岐にわたり、すべてが貴重なものであったが、そのうち最も重要な指摘は、本校小・中・高3学部に関連性・一貫性をさらに明らかにする必要がある。という点であった。そこで今回はこの点に留意し、またわれわれ自身の反省点も加えて、前回の発表内容を手直した上、予定どおり、ここに発表することとした。

そうはいうものの、本年2月の発表から僅か3カ月後の、しかもこの間に年度が変わって卒業・入学の行事や職員の異動もあるなどのあわただしい時期をはさんでのことだけに、今もって不十分な点を多く残したものであることはよく自覚している。この紀要第5集は、第4集の延長線上にあるもので、決して大きな飛躍をとげたといえるものではない。実質的には、これが新しい研究主題による第1回目の発表である。今後回を重ねて、さらによいものに仕上げて行きたいと考えている。

ところで、去る3月には本校高等部から2期生として8人の卒業生を送り出したのであるが、これらの者の社会参加には、われわれとして期待もあり、また一方気がかりも残るところである。いうまでもなく、研究はそれ自体が目的なのではなく、子供達の中にこそその成果があらわれるものであるから、こうして卒業して行った者たちや、あとに続く本校児童生徒が、これから如何に「豊かな心、たくましい行動」を身につけるか、身につけたかが、われわれの実践の成果をはかる尺度となる。この研究主題の内容については、以下の「主題への取り組み」や学部毎の実践報告の中で述べてあるので、これらについて、理論的、実際の見地からご意見をいただければ幸いである。

このあと、われわれは引き続き実践にもとづく研究を重ね、次回には一段と異なったものをお渡しできるよう、努力を続ける考えである。